

ふところのある住まい

—大扉の操作による行いの包括—

背景

住まいの原点は再考どころか再再考、繰り返し問われているテーマです。特にこの半世紀、家族の様態も大きく変わり、また都市を含む環境も地球規模で変わっています。技術も然りです。

さまざまな快適さを追求すると、家はどんどん重装備になっていきます。

一方で、住宅を取り巻く経済状況は厳しさを増しています。

原始時代に戻るわけではなく、昨今この国における生活を深く考察したうえで、本当に大切なものはなにか。今あるべきと考える住まい像を提案します。

提案概要

「住まいの原点を再考する」という問いに対し、住まいにとって本来あるべき機能を考えることから始めた。

原初的な住まいは「寝る」という“行い”を満たすことによって住まいとなっていた。そのため、木と草を積み上げ、雨風を凌ぐのみの構成となっている。そして、時が経ち、人が住まいに求める“行い”が次第に増えてきた。例えば「釣殿」。これは、釣りをするために設けられた場である。そして、お茶をするための「茶室」など“行い”をするための場が多様化してきた。

これらに「床の間」や「寝室」などが加えられ、住まいとなっている。このように、住まいの原点を考察すると、人の“行い”を包む場であったといえる。さらに現代に至っては、住まいに快適な環境を造り上げることができるようになったことや、人々のライフスタイルが多様化したことによって、住まいでの“行い”が複雑になってきた。子どもはゲームや勉強、母親はフィットネスやお茶会、父親はパソコンやゴルフ、それにペットが共に住まう。このように、過去の住まいとは、比べ物にならないほど、住まいでの“行い”は多種多様になった。このような計画背景のもと、私達の設計は始まった。

日々、刻々と多様化する居住者の“行い”を包む住まい。

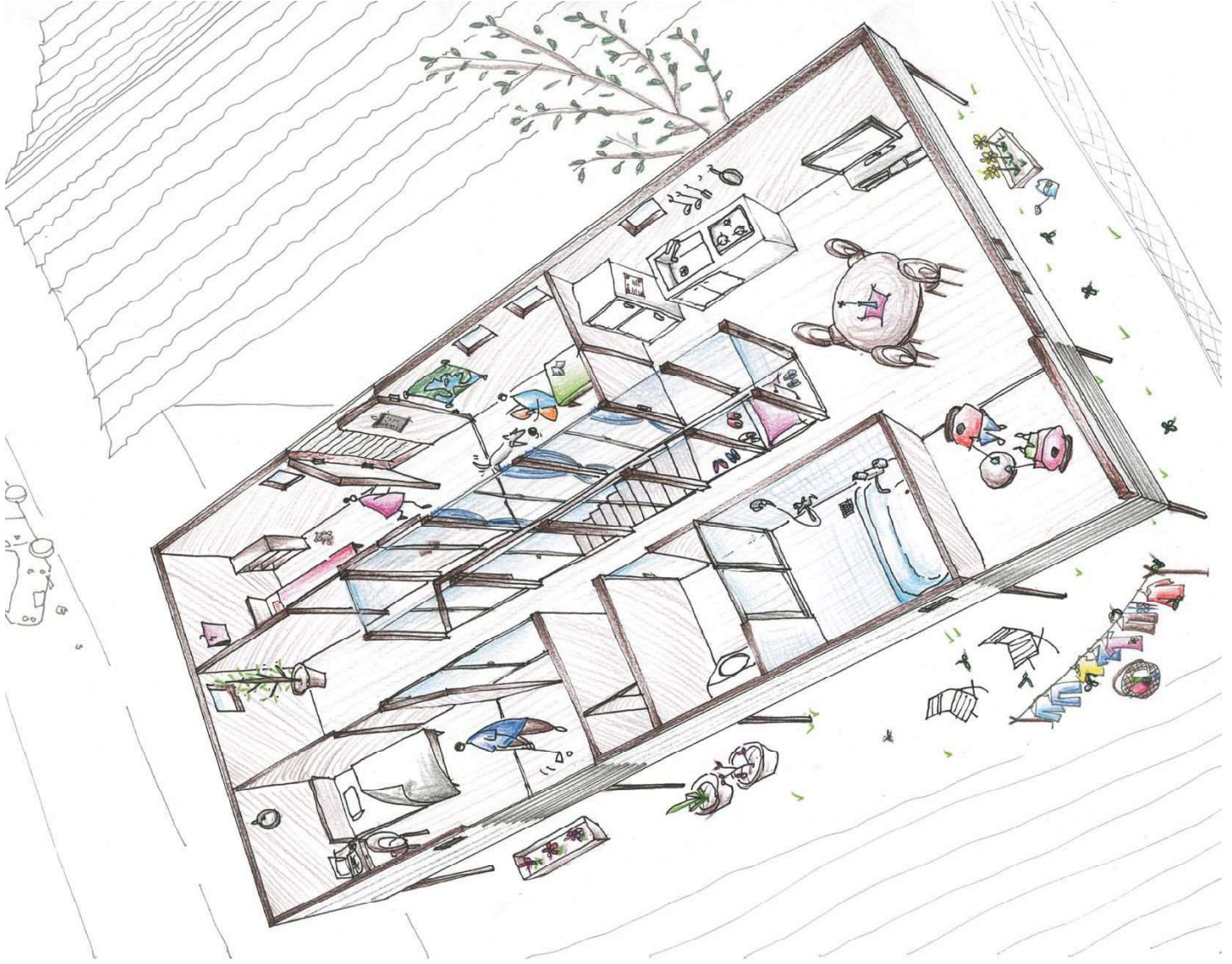
これが、私達のコンセプトである。そして、これを実現させるための手法として、居住者の各居室に接続可能な余剰の空間「アダプティブスペース」を設ける設計を行った。「アダプティブスペース」とは、自分の部屋に大扉で仕切られたもう一つの部屋を意味する。その大扉を開けると、自分の部屋に“行い”が可能な場が接続される。そのため、「寝る」「食事をする」「机に向かう」などの基本的な“行い”をする時以外は、この「アダプティブスペース」によって、その活動空間を創りあげることができる。

また、この「アダプティブスペース」は、半屋外空間となっているため、この空間と接続することで、良好な室内環境を維持することも可能である。

ここで、本提案による「アダプティブスペース」の役割を挙げる。

- ・多様な“行い”を包む
- ・室内環境の向上に寄与する

このように、住まいに「アダプティブスペース」を設けることは、快適な居住環境を齎すことに加え、住まいが様々な“行い”を包む場となり、本来の住まいのあり方の提示となる。



ふところのある住まい — 大扉の操作による行いの包括 —

私達は「住まいの原点を再考する」という問いに対し、住まいにとって本来あるべき機能を考えることから始めた。

原始的な住まいは「寝る」という「行い」を満たすことにより住まいとなっていた。そのため、木と草を積み上げ、雨風を遮るのみでの構成となっていた。そして、時が経ち、人が住まいに求める「行い」が次第に増えてきた。例えば「釣籠」。これは、釣りをするために設けられた場である。そして、お茶をするための「茶室」など「行い」をするための場が多様化してきた。これらに「床の間」や「障室」などが加えられ、住まいとなっている。このように、住まいの原点を考察すると、人の「行い」を包む場であったといえる。さらに現代に至っては、住まいに快適な環境を盛り上げることができるようになったことや、人々のライフスタイルが多様化したことにより、住まいでの「行い」が複雑になってきた。子どもはゲームや勉強、時期はフィットネスやお茶会、父親はパソコンやゴルフ、それにペットが共に住まう。このように、過去の住まいとは、比べ物にならないほど、住まいでの「行い」は多種多様になった。このような計画背景のもと、私達の設計は始まった。

日々、刻々と多様化する居住者の「行い」を包む住まい。

これが、私達のコンセプトである。そして、これを実現させるための手法として、居住者の各居室に接続可能な余剰空間「アダプティブスペース」を設ける設計を行った。「アダプティブスペース」とは、自分の部屋に大扉で仕切られたもう一つの部屋を意味する。その大扉を開けると、自分の部屋に「行い」が可能な場が接続される。そのため、「寝る」「食事をする」「机に向かう」などの基本的な「行い」をする時以外は、この「アダプティブスペース」によって、その活動空間を創り上げることができる。

また、この「アダプティブスペース」は、半屋外空間となっているため、この空間と接続することで、良好な室内環境を維持することも可能である。

ここで、本提案による「アダプティブスペース」の役割を挙げる。

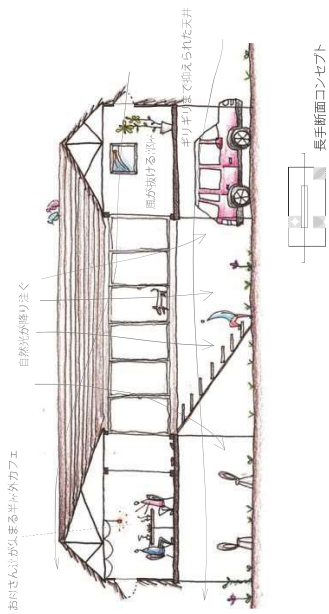
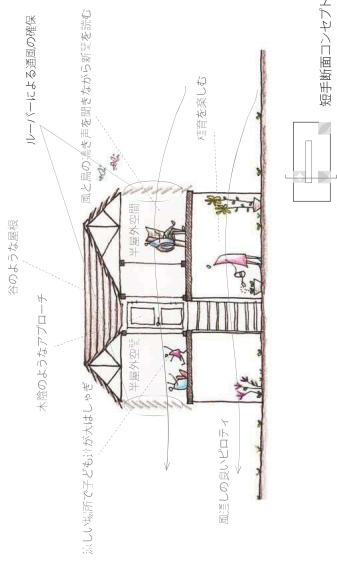
- ・多様な「行い」を包む
- ・室内環境の向上に寄与する

このように、住まいに「アダプティブスペース」を設けることは、快適な居住環境を齎すことに加え、住まいが様々な「行い」を包む場となり、本来の住まいのあり方の提示となる。



■ 立面計画

この住まいは「外部に開く住まい」ではなく「内部が開かれた住まい」になっており、プライバシーを確保しつつ、自然環境との共生が可能になる。そして、外部の自然環境に快適さを求めるのではなく内部に自然環境と関わる空間を設けることで、この住まいが住まう家族にとって、日光や通風を中心とした活動の場になる。

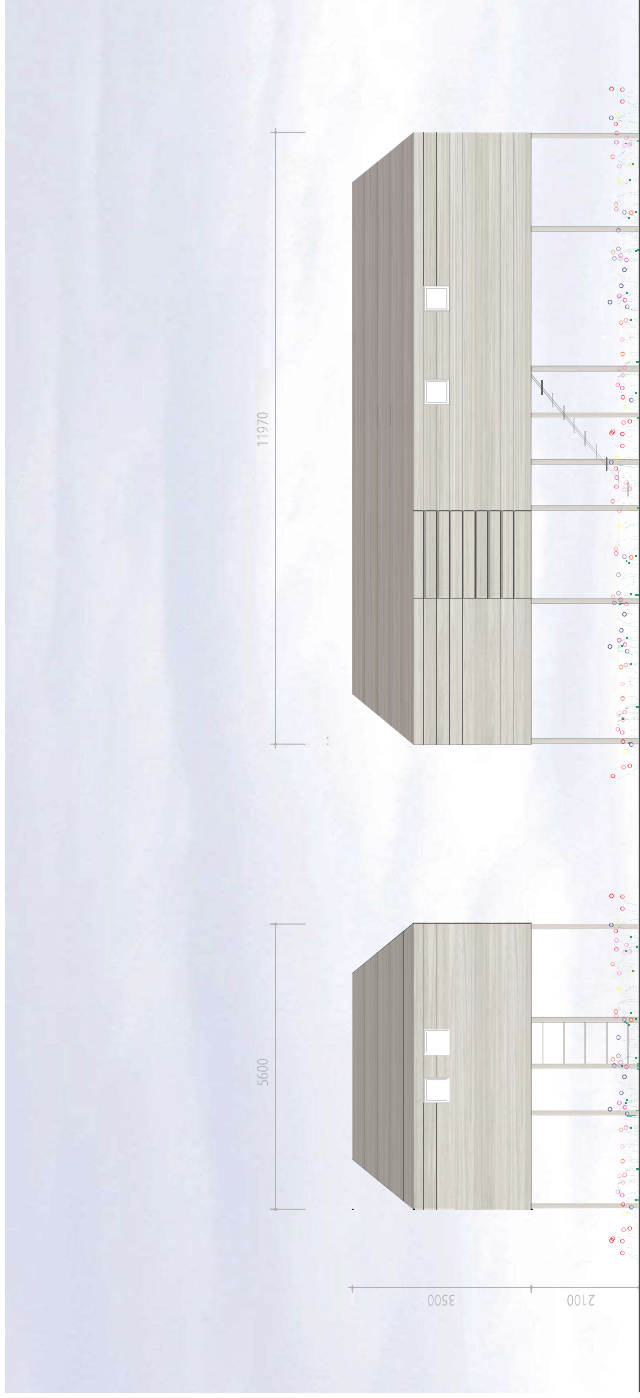


立面は巨葉葺のようなシンプルなファサードになっており、熱の放出や温度安定などの工夫がなされている。また、「アダプティブスペース」は風が通り抜ける半屋外空間となっており、風の抜け道となる。

■ 素材

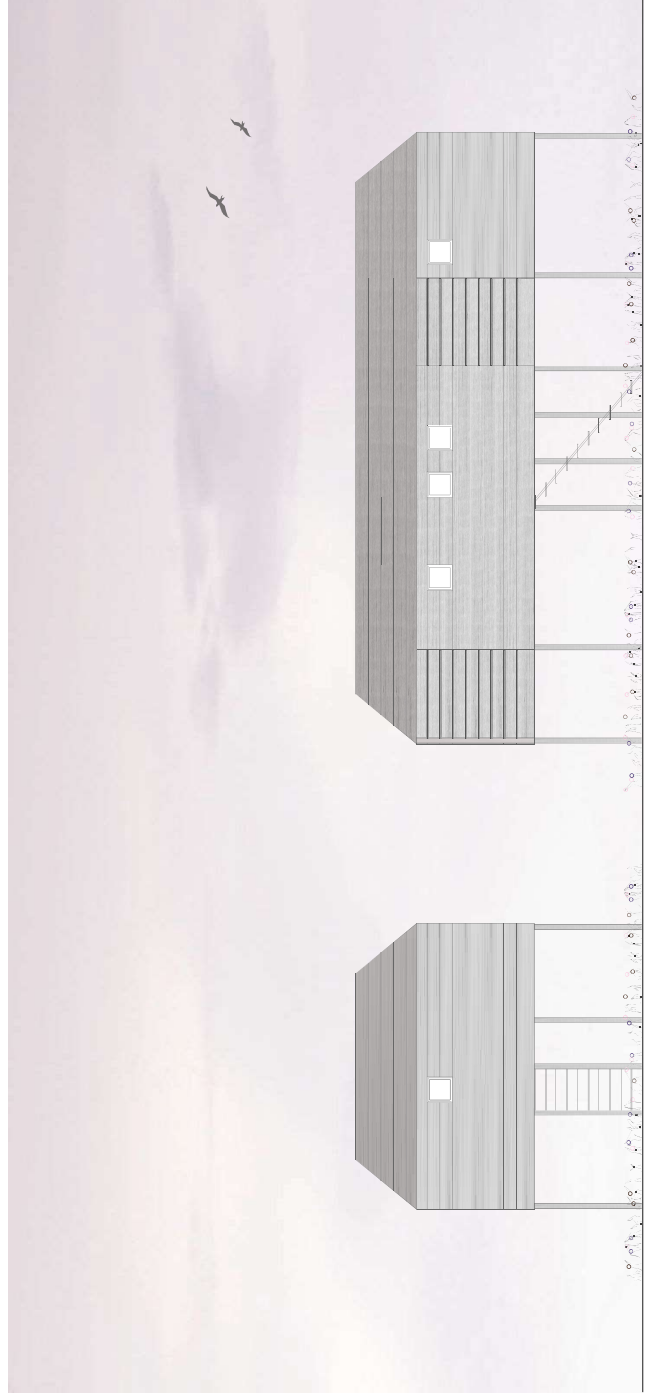


白い外壁は熱を逃がす役割を果たす。この白い外壁によって、半屋外空間は快適になる。



北側立面図 S = 1/100

西側立面図 S = 1/100



南側立面図 S = 1/100

東側立面図 S = 1/100